

「赤穂義士と山鹿素行」

赤穂山鹿素行研究会編集

『仮名手本忠臣蔵』十一段、高師直郎討ち入りの段で大星由良助が合図で叩いたのが、山鹿流の陣太鼓である。歌舞伎や人形浄瑠璃、テレビドラマで馴染みの光景であるが、史実的には儒学者にして兵学者である山鹿素行が起こした山鹿流兵法には、陣太鼓は存在せず、物語の中の創作のようだ。しかし、竹田出雲にせよ、元禄時代の戯作者にも赤穂義士と山鹿素行の深い縁は広く知られていたことを示している。

山鹿素行 赤穂で壮年期を過ごす

山鹿素行は江戸時代前期を代表する高名な学者である。門弟が三千名から四千名いたとされ、諸藩にその教えは広く知られていた。特に、赤穂藩とは縁が深く、1652年（承応元年）31歳の時、浅野長直の招聘に応じ、浅野家に仕え、翌年から翌々年まで赤穂に滞在した。後、1666年（寛文6

年）罪を得て赤穂に配流、45歳から1675年（延宝3年）54歳で配流赦免されて江戸へ帰るまで、合計約10年は赤穂にいたのである。

特に、壮年期を赤穂で過ごし、48歳で「中朝事実」を著し、日本古学を確立した。大石内蔵助の大叔父大石良重が赤穂配流時に手厚く遇し、幼少のころの内蔵助は大叔父に連れられ直接、薫陶を受けたと伝えられている。弟子の一人である。

素行の教えの中心思想は「聖学」であり、儒学の古聖人が説いた道徳的な実践的な教えである。

学問が世間と合致し、人倫の実現、日用の実践に役立つべきと考えた。聖人の教説は「礼」を中心とし、おのれの生活規範と学習の目標にすべきとした。そして、平和な時代に於いて為政者である武士が守るべき道として「士道」を唱えた。そこに貫かれているのは観念論ではなく、「一日の用を正す」、一日一日自分に与えられた時（現代風

に言うなら一分一秒）をおろそかにすることなく充実して勤めよ、真剣に学び、働くことである。

また、国家のあるべき姿について「五倫の道」、つまり「君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」の道を究めた道義国家こそ最も安定した国家社会として目指すべきとした。赤穂義士の精神性の高さには、山鹿素行の教え、武士道における「礼」が柱となつていいるから、三百年以上たった今も、日本人の意識を揺さぶり続けているといえるだろう。また、吉田松陰は10歳の頃、藩校明倫館で素行の「武教全書」の講義をして驚かせたとされ



赤穂城跡二之丸にある山鹿素行の銅像

るが、吉田家は山鹿流師範家であり、素行を先師として松下村塾を開き、明治維新に結びつく有能な人材を育成したのである。更に、乃木希典は、素行の遺徳を偲ぶ、素行会の初代会長を勤めている。教育勅語にも、素行の教えが生かされている。そして、兵庫県立旧制赤穂中学（現赤穂高校）は義士精神と素行の遺風を建学の精神として設立され、「質実剛健」と「実践躬行」の校風が今も伝統として受け継がれている。

平成21年全国フォーラムを 開催

その山鹿素行の遺業を赤穂の地で研究し、その現代的意義を普及させる目的で、赤穂山鹿素行研究会は2009年（平成21年）8月に設立された。そして、同年9月27日には「赤穂義士と山鹿素行」全国フォーラムが赤穂市文化会館で開催され、記念講演とパネルディスカッションが行われた。

記念講演では、創造文化研究所所長の中島剛氏が「赤穂義士を育てた山鹿素行の思想」を、パネルディスカッションでは、赤穂に関わりの深いジャーナリスト、教育者が参加して多彩な論議が交わされた。

その際コーディネーターを務めたジャーナリストの山本明氏と実行委員会・実務者代表を務めた榎努氏が中心となって全国フォーラム全容などをまとめた冊子を昨年2010年9月1日に発刊した。116ページにわたり、山鹿素行と赤穂義士の関係がよくわかる内容となっている。山本氏および榎氏はいずれも旧制赤穂中学で文武両道に励み、大学卒業後、それぞれ社会で活躍し、定年退職後赤穂に戻

り、故郷の発展と赤穂義士の遺徳を偲ぶ活動を続けている。執筆、編集した山本・榎両氏は、「この冊子で山鹿素行先生が忠臣蔵の原点であり、赤穂義士の心を育て明治維新から現代に至るまで学徳の流れが続いていることが分かります。播州赤穂だけでなく、全国の方に読んでいただいて、山鹿素行先生の教えを知るきっかけにしたいだけです。」と話されています。



この冊子は一冊千円である。興味のある方は、赤穂山鹿素行研究会（赤穂市上飯屋南21-1、電話・FAX 0791-46-5575）に問い合わせを。

ちなみに、赤穂山鹿素行研究会は原則的に3カ月に一回、研究会を開催している。昨年9月26日の素行命日に大石神社境内の山鹿神

社および素行銅像前で素行325年祭を行い、市民会館で総会ならびに記念講演会が開催された。今年も9月25日に、同様な行事を計画している。

Series Learning about Ako Yamaga, Sokou

Yamaga Sokou was a highly respected scholar in the Edo Period. He has no connection at all with the Ako Clan. In 1652, when he was 31 years old, he entered the service of the lord of the Asano Clan. For 2 years from the time he was 32 and again from 1666 to 1675, from the age of 45 to 54 he was again in the service of the Ako Clan. During this time he taught the samurai of the Ako Clan the ideas and art of war of Sokou. This later became the spiritual support behind the epic called Chushingura. Sokou emphasized the importance of living each day carefully. He taught the samurai how to live during times of peace. This became the ideological background of the samurai during the Meiji Restoration (1868). Trying to bring to life the teachings of Yamaga Sokou today is the Ako Yamaga Sokou Research Association. It was established in 2009. On September 27 it held the Ako Samurai and Yamaga Sokou National Forum during which there was a commemorative address and a panel discussion. This became the subject of a book which was published in September of 2010.

2011年 No.30

マグネシア・ミュー

編集・発行

タテホ化学工業株式会社

〒678-0239 兵庫県赤穂市加里屋字加藤974番地

TEL 0791-42-5041 (代表)

FAX 0791-45-2040

(本誌記事等の無断転載・複写を禁じます)